

小林 敏（こばやし とし）

## 版面の設計と書籍の構成要素

### 日本語組版とつきあう 4

#### 基本版面の設定と文字の配置

掲載日：2011年12月09日

基本版面とは文字や図版を配置する基本的な枠組であり、組方向、段数と段間、文字サイズ、字詰め数、行数、行間で指定する。

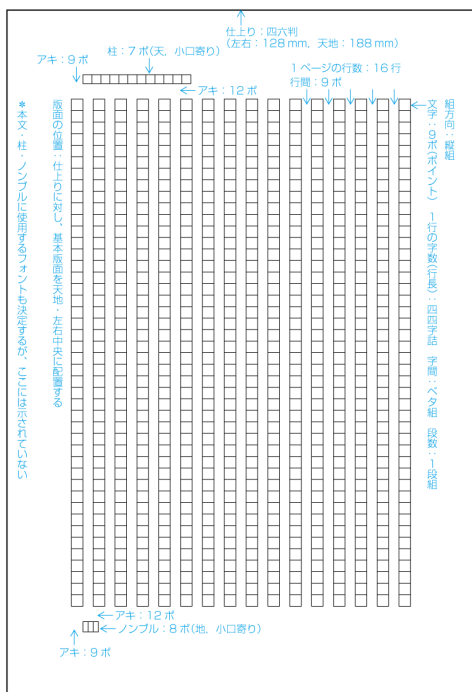
#### 基本版面とは

印刷物を作成する場合、一般になんらかの枠組を考え、枠組に応じて文字や図版を配置する。書籍の場合も同様に、文字や図版を配置する基本的な枠組として、組方向、段数と段間、文字サイズ、字詰め数、行数、行間で指定される版面を設計する。

この基本として設計される版面体裁を“基本版面”と呼んでいる。（なお、“基本版面”という用語は、1972年に刊行された“校正技術”で使われた用語である。）

基本版面については、仕上りサイズに対する位置を一般に見開きの状態で決める。さらに、柱やノンブル（ページ番号）に使用する文字や配置位置も決定する。

図1に、1ページであるが例を示す。



## 設定した枠組に文字をどう配置するか

基本版面として設定した枠組に、文字・図版・表をどのように配置したらよいか。図1に示した文字位置、行の配置位置、版面サイズは、どの程度の強制力を持っているか、という問題でもある。

簡単に原則を示すと以下のようになる。

- ① 基本版面として決定した版面や段組など、その構造は可能な限り維持し、その領域内に各要素を配置する。しかし、例外がある。

- ② 基本版面として決定した行の位置に、それぞれの行を可能な限り配置する。しかし、例外がある。
- ③ 基本版面で決定した文字位置に、それぞれの文字を可能な限り配置する。しかし、例外がある。

例えば、図版や表はできるだけ版面内に配置することが望ましい。これは見た目の体裁上の問題もあるが、かつて活字組版において各ページの組版のサイズが異なると様々な作業上の問題が出るという理由もあった。

コンピュータを利用した組版ではこうした問題はないので、図版などを版面の領域をはみ出して配置することも簡単にできる。ただし、それが体裁としてよいかどうか、よく検討したうえで選択する必要がある。

また、版面の先頭行に付くルビや圈点は、基本版面で決めた行位置を維持するために、版面の外側に配置する。

### 行の配置位置を維持する

行位置は、原則として基本版面で決めた行位置に揃えて配置する。文中の括弧書きの文字サイズを小さくすることがあるが、これの分量が多くて数行にわたる場合も基本版面で決めた行位置に揃えて配置する。

しかし、本文とは別の段落となる注や引用文など文字サイズの異なる要素や別行の見出し、別行の分数式、表・図版が挿入された場合は、なんらかの工夫が必要になる。

注や引用文の文字サイズを小さくした場合、行間もそれに応じて狭くしないとバランスが悪くなり、当然、基本版面で決めた行位置に配置できなくなる。

この場合、注や引用文の直後の本文の行位置を基本版面で設定した行位置に配置し、基本版面の行位置を維持する。

見出しでも、基本版面で決めた行位置を基準に、その整数行の領域に配置する（この方法は“行取り”という）。そうすれば、影響を他に及ぼすのを防ぐことができる。

数式などを行取りで配置する方法もある。その場合、同一ページに上下の幅の異なる分数式が存在すると、分数式の前後の行間が不揃いになる。そこで、版面の先頭の行と最後の行位置は揃えるが、分数式の前後の行間を均等にする方法も行われている（この方式の方が多い）。

図2と図3に例を示す。

### 文字の配置位置を維持する

行中に基本版面で設定した文字サイズですべて配置できればよいが、そうではない場合も多い。

全角でない文字・記号や異なるサイズの文字を挿入する、異なるアキをとる、行頭禁則、行末禁則の処理を行うといったことがあり、基本版面で決めた文字位置に配置できないケースも多い。

そこで、前回に簡単に説明した“行の調整処理”の問題が出てくる。（※原則と応用【日本語組版とつきあう 3】）

また、図版や表を挿入した場合、縦組では、その下側に文字を配置する例も多い（“回り込み”という）。この場合、配置する行の先頭の文字は、基本版面で決めた文字位置にしないと、すべての行で“行の調整処理”が必要となり、不必要に字間が空いたり、約物の前後が詰められたりするので、注意が必要である。

このように、基本版面で設定した枠組に文字などをどう配置するかは、組版処理するうえで、とても重要な問題である。

基本版面の設定で決まっている文字位置を示す枠

分数とは、数（または式）を0でない数（または式）で割った結果を、次のように横線の下に除数を、横線の上に被除数を記して表したもので、横線の上のものを分子、横線の下のを分母という。分子が1である分数を単位分数という。

$$\frac{n}{m} \cdot \frac{1}{4}$$

また、分母または分子が分数である分数は繁分数とよばれている。繁分数は、分子を分母で割る、または分子と分母に数（または式）を掛けることにより普通の分数に変えることができる。

例えば、次のような繁分数が与えられた場合、

$$\frac{1}{1 + \frac{1}{x+1}}$$

分母と分子に  $x+1$  を掛けると次のようになる。

$$\frac{x+1}{(x+1)+1} = \frac{x+1}{x+2}$$

また、分子が分母より小さい分数を真分数といい、値は1より小さくなる。分子が分母より大きい分数は仮分数といい、1より大きくなる。

分数の四則計算では、分母が同じ2つの分数の場合の和または差は、その共通の分母を分母とし、分子の和または差を分子とする分数である。分母が違う分数の場合は、まず分母を同じにするために通分してから、分子の和または差を分子として計算する。

半端分を  
均等に割り  
振っている

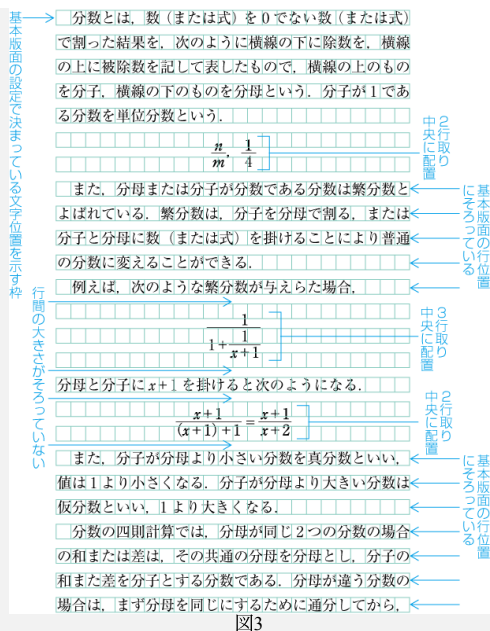
基本版面の行位置  
からずれている

半端分を  
均等に割り  
振っている

半端分を  
均等に割り  
振っている

基本版面の行位置  
にそろっている

図2



©Japan Association of Graphic Arts Technology

## 日本語組版とつきあう24

### 行送り方向の版面サイズの調整

掲載日：2013年07月17日

### 行送り方向の版面サイズの調整

段落間に後注を挿入する場合、行送り方向の版面サイズの調整が必要になる。これ以外に、横組を例にすると、字詰め方向の左右には文字を配置しない図版を段落間に挿入する、あるいは、別行にした分数などの数

式を段落間に挿入する場合にも、行送り方向の版面サイズの調整が必要になる。

このように、基本版面の設定で決定した文字の配置方法とは異なるものを配置するとき、行送り方向の版面サイズの調整が必要になる場合がある。

## 版面サイズの調整方法

行送り方向の版面サイズを調整する方法としては、次のような方法がある。

- ① 行ドりで配置する
- ② 指定した行を基本版面の設定で決定した行位置に配置する
- ③ 配置した要素の前後の行間を変化させ、版面サイズを調整する

行ドりで配置する方法では、基本版面の設定で決定した行位置を基準に、整数の行数で見出しなどの配置領域を設定する。調整というよりは、行送り方向の版面サイズに半端がでないようにする方法である。見出しなどの配置に利用されている。

ある要素の前または後ろの行間を調整する方法は後注などで、前後の両方の行間を調整する方法は数式や図版・表の配置などで利用されている。

なお、見出しを行ドりで配置する場合、ページ末にきた見出しをどう処理したらよいかという問題もある。一般に横組では奇数ページも偶数ページも、ページ末にきた見出しは、次ページに追い出す処理を行う。これに対し、縦組では、奇数ページの末尾にきた見出しは、追い出して、次の偶数ページの先頭に配置し、偶数ページでは、すぐとなりに奇数ページがつづくので、そのままページ末尾に配置する方法とする例が多

い。また、ページ末に指定した行数がない場合も次ページに見出しは追い出し、ページ末は空けたままにしておく。

## 数式の配置例

ここでは、数式を別行にして配置する場合について例を示す。

図1には、別行の数式を行ドリで指定し配置した例を示す。

図2は、数式の前後の行間を変化させて版面サイズをそろえた配置例を示す。

図2の方法は、数式の前後の行間の最小値を本文の行間とし、行送り方向の版面サイズに半端（不足）が発生した場合は、数式の前後の行間に均等に配分して版面サイズの半端を調整している。

図1の方法は、数式以外の本文は、他のページの行位置とそろえるが、数式の前後の行間にばらつきがでる。

図2の方法は、数式の前後の行間は一定になるが、本文の行について、基本版面の設定で決定した行位置に配置されない場合もでてくる。

数式を組む場合、一般には図2の方法で配置するが、段組で数式も多くでてこない場合には、図1の方法とする例もある。

## 行間で半端を調整する方法

図2のような処理を手動で行う場合、活字組版では比較的に簡単であったが、コンピュータ組版ではかなり厄介である。正確に行うためには、かなり面倒な計算を行う必要がある。したがって、行の調整処理を自動処理させるように、版面サイズの調整方針を指示しておくことにより、版面サイズの自動処理ができることが望ましい。

それができない場合、版面サイズの半端を吸収する（追加する）コマンドを挿入する方法も考えられる（このようなコマンドを準備しているコンピュータ組版システムもある）。版面サイズに半端（不足）が発生し



た場合、このコマンドが挿入されている行位置に、その半端分を均等に追加する。

なお、行間を変化させ、行送り方向の版面サイズの調整する方法では、一般に、詰める調整は行わないで、空けて調整する方法が一般的である。

行の調整処理の自動処理は、初期のDTPなどでは問題も多かったが、今日ではその処理もすいぶん改善されている。これと同様に、行送り方向の版面サイズの調整処理の自動化についても改善されることを望んでいる。

基本版面の設定で決まっている文字位置を示す枠

分数とは、数（または式）を0でない数（または式）で割った結果を、次のように横線の下に除数を、横線の上に被除数を記して表したもので、横線の上のものを分子、横線の下のを分母という。分子が1である分数を単位分数という。

また、分母または分子が分数である分数は繁分数とよばれている。繁分数は、分子を分母で割る、または分子と分母に数（または式）を掛けることにより普通の分数に変えることができる。

例えば、次のような繁分数が与えられた場合、

分母と分子に  $x+1$  を掛けると次のようになる、

また、分子が分母より小さい分数を真分数といい、値は1より小さくなる。分子が分母より大きい分数は仮分数といい、1より大きくなる。

分数の四則計算では、分母が同じ2つの分数の場合、和または差は、その共通の分母を分母とし、分子の和または差を分子とする分数である。分母が違う分数の場合は、まず分母を同じにするために通分してから、

図1 ※クリックすると拡大します。

2行ドリ 中央に配置

基本版面の行位置

3行ドリ 中央に配置

2行ドリ 中央に配置

基本版面の行位置

基本版面の設定で決まっている文字位置を示す件

→  分数とは、数（または式）を 0 でない数（または式）  
 で割った結果を、次のように横線の下に除数を、横線  
 の上に被除数を記して表したもので、横線の上のもの  
 を分子、横線の下ものを分母という。分子が 1 であ  
 る分数を単位分数という。

$\frac{n}{m}$

また、分母または分子が分数である分数は繁分数と  
よばれている。繁分数は、分子を分母で割る。またはは  
分子と分母に数（または式）を掛けることにより普通  
の分数に変えることができる。

例えば、次のような繁分数が与えられた場合、

$\frac{1}{1 + \frac{1}{x+1}}$

分母と分子に  $x+1$  を掛けること次のようになる。

$\frac{x+1}{(x+1)+1} = \frac{x+1}{x+2}$

また、分子が分母より小さい分数を真分数といい、値  
は 1 より小さくなる。分子が分母より大きい分数は仮  
分数といい、1 より大きくなる。

分数の四則計算では、分母が同じ 2 つの分数の場合  
の和または差は、その共通の分母を分母とし、分子の  
和または差を分子とする分数である。分母が違う分数の  
場合は、まず分母を同じにするために通分してから、  
分子の和または差を分子として計算する。

図2 ※クリックすると拡大します。

行間 6 ポイン  
ト + 半端分  
基本版面の行位置  
からずれて  
いる  
行間 6 ポイン  
ト + 半端分  
行間 6 ポイン  
ト + 半端分

## 日本語組版とつきあう その41

### 行間の選択

掲載日：2015年3月4日

## 字間と行間の選択

文字組版の設計では、使用する文字サイズやフォント、版面サイズ、1行の字数、1ページの行数などを決定する必要がある。

なかでも、字間と行間の選択は重要である。字間は一般にはベタ組を選べば、大きな問題はでない。特別な目的があれば、ツメ組やアキ組とするが、これを選ぶ場合、ある程度の経験を必要とする。

これに対し、行間は、なんらかの値を選ばないといけない（欧文組などでは行間をゼロにする例があるが、和文では表組など特別の部分で行間をゼロにする例を除き、行間をゼロとはしない）。経験の少ない人の設計した行間では、狭すぎて読みにくい例や、あるいは逆に不必要に広すぎて、バランスを欠いた例を見掛けることもある。

## 行間を見る目を鍛える

適切な行間を選ぶためには、いろいろな本や印刷物で行間を観察し、どの範囲であれば適切かを確認する必要がある。いろいろな本や印刷物の行間を見て、判断基準を自分なりに作成していくとよい。

市販されている判型がB6の本（実際には四六判の本が多い）では、1段組の本文の文字サイズは9ポイント（または13級）が多い。縦組の場合、本文9ポイントを例にすると、14行（この例は少ない）や15行（この例も最近はやや少ない）であれば、ほとんどは行間9ポイントである。16行であれば行間8ポ（この例も最近はやや減っている）、17行であれば行間7ポイント、18行であれば行間6ポイントくらいである。なかには、19行以上もあるが、これはさらに詰まる。

B6や四六判の縦組の本を読む機会も多いので、こうした本で、どれくらいの行間がよいか注意するとよい。私は、16行の行間8ポイントくら

いを限度として、読みやすい本を作ってほしいと思っているが、詰め気味の本も多い。

## 行間と行送り

行と行の間隔を指定する方法には、行間で指定する方法と行送りで指定する方法がある。この2つは、以下の関係があり、簡単に換算できるので、慣れた方法で指定すればよい（以下では、すべて行間で説明する）。

$$\text{行間} = \text{行送り} - \text{文字サイズ}$$
$$\text{行送り} = \text{文字サイズ} + \text{行間}$$

適切な行間を知るためには、観察した印刷物の行間がどれくらいか調べる必要もでてくる。行間は、ものさしがあれば、次の方法で調べることができる。

## 文字サイズを調べる

まず、ものさしで調べる場合、文字サイズを次のような方法で調べる。

- ① 測る文字組のベタ組になっている部分を探す（ベタ組と確実に判断できる印刷物などで、目を慣らしておくといよい）。
- ② 1文字で測ると誤差が大きくなる。そこで、計算しやすいように10文字分の端から端までの長さを“ミリ（mm）”単位で測る。
- ③ 測った“ミリ（mm）”単位の長さについて3.528（または3.514）か、2.5で割る。

3.528はDTPポイント、3.514はJISポイント、2.5は級数を文字サイズの単位とした場合である。それぞれの1ポイントまたは1級のミリ数を10倍したものである。最近では、0.5単位で文字サイズを選ぶ場合もあるが、一般には整数単位で文字サイズを選ぶことが多いので、計算した結果、

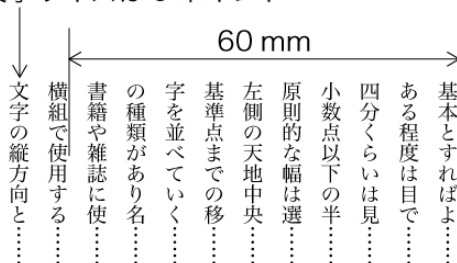
最も整数（または0.5単位）に近いものが、その文字サイズと考えられよう。

## 行間を調べる

文字サイズがわかったところで、次の方法で行間を調べることができる（図1参照）。行間も、誤差がでないように、また計算しやすいように10行分で測るとよい。

- 1 縦組を例にすれば、1行目の右端から11行目の右端までの長さをものさしで測る。これが10行分の行送りの合計になる。
- 2 これを文字サイズで採用した単位の数値である3.528（または3.514）か、2.5で割り、ポイント数か級数を求める。これが行送りの大きくなる。
- 3 行送りから文字サイズを引いたものが行間の大きくなる。（図1参照）

文字サイズは9ポイント



10 行分（行間を含む）の長さを

3.528 で割る

$60 \text{ mm} \div 3.528 = 17.007$

→行送り 17 ポイント

→行間 8 ポイント

図1

## 行間を選択する際の目安

書籍を例にすると、行間を選択する際の目安とし、次のようになる。これを実際の場合に応用し、適切に選択していけばよい。

- ① 本文（字詰が多い場合）は、使用する文字サイズの全角かやや詰める。例：A5、横組、9ポイント、1行35字、行間は9ポイントから7ポイントくらい、詰めても6ポイントくらい。
- ② 本文（字詰が少ない場合）は、20字くらいであれば使用する文字サイズの二分までは可能、余裕があれば二分よりやや空ける。空けても文字サイズの2/3くらい。
- ③ 注などでは、縦組の1段組の専門書などでは字数が多いので、本文の行間にもよるが、注に使用する文字サイズの二分四分から、詰めても二分くらいである。これに対して横組の脚注では、二分くらいか、それよりやや詰めた方が体裁がよい。
- ④ 表組では、通常は表に使用する文字サイズの二分にすればよい。大きな表では二分よりやや詰めた方がよい（その代わりに5行または10行ごとに大きく空ける）。なお、項目名など部分的に2行にする箇所は、他の項目のセル（こま）の幅をそろえるために行間をゼロまで詰めてよい。
- ⑤ 表や図版のキャプションでは、一体として読めるようにキャプションに使用する文字サイズの四分から二分くらい。
- ⑥ 見出しを折り返す場合は、一体として読めるように見出しに使用する文字サイズの三分か四分くらい。

## 日本語組版とつきあう その45

### 索引の作成と組版処理

掲載日：2015年9月8日

## 索引の作成

実用書や学術書では読者の利用を考慮し、できるだけ索引をつけるのが望ましい。

どんな項目を索引として抽出するかは本の内容による。一般的に言えば、読者が知りたい、あるいは調べたいと予想される項目が抽出されている必要がある。読者が索引で調べようとした際に、“該当項目が索引にない”といったことがないのが理想である。

そのためには、本の内容を最も詳しく理解している著者が索引項目の抽出を行うとよい。実際には、担当編集者が著者の指示のもとに行う場合もある。

## 索引項目の表示

事項索引で、1つの索引項目にページ数が3つも4つもついている索引がある。せっかちな読者は1回の操作で該当箇所を見てみたいと思うので、できるだけ限定した索引項目にし、各項目につく該当ページ数を少なくしたほうがよい。

また“原稿整理”といった場合、読者は“原稿”で索引を引くだけでなく、“整理”で調べるかもしれない。両方が予想される場合は2つとも掲げるという方法もある。

また、一般には親項目と子項目のように階層を設けたほうが利用しやすい。

## 索引の版面サイズと行間

索引は、一般に項目とページ数をセットにして掲げるので、1行の字数はそれほど必要としない。そこで、本文が縦組でも、索引は横組とし、段組とする場合が多い。

索引版面は、本文版面とほぼ同じサイズにする。まったく同じとはならないので、本文版面との差は、天地・左右に平均に割り振ればよいが、天地の差は下部にとってもよい。

索引の文字サイズは、8ポイントか7ポイントくらいである。行間は、一般に索引に使用する文字サイズの二分とする例が多いが、索引の分量が多い場合は、二分よりもやや狭めてもよい。

## 数字を区切るコンマ

1つの項目のページ数が2つ以上になる場合、コンマで区切る。このコンマの配置例を図1に掲げる。

- ① 四分ものコンマを使用、後ろはベタ組
- ② 四分ものコンマを使用、後ろは四分アキ
- ③ 全角ものコンマを使用、（字幅は二分と考え）後ろはベタ組
- ④ 全角ものコンマを使用、（字幅は二分と考え）後ろは二分アキ

和文との混ぜ組に使用するアラビア数字の字幅は、一般に二分である。このような字幅の文字を並列する場合は、一般の和文の配置法と同じ（4）では空き過ぎである。逆に（1）のように四分ものコンマを使用し、後ろはベタ組にすると詰まり過ぎに見える。

そこで、（2）または（3）のように、コンマの占めるスペースとしては、二分にするとよい。

図1で使用したフォントの例では（2）と（3）の差異はほとんどない。どちらを使用するかは、フォントのコンマのデザインを考慮して決めればよい。



## 本文中の数字を区切るコンマ

アラビア数字を並列する例は、横組の本文中にもでてくる。この場合も、他の和文と同様に図1の（4）のような配置にすると空き過ぎである。

このような例でも、図1の（2）または（3）のようにするとよい。横組でこのような処理をした場合、1字のラテン文字を併記するときも同様な処理にするのが望ましい。

## 項目とアラビア数字の間

図1では、項目とページ数の間は全角アキである。一般に、この間は2倍アキとしている例が多い。

項目とページ数の区切りが分かればよいのであるから、このアキは全角で十分であり、2倍にする必要はないという考えからである。

また、ページ数を行末に配置し、項目とページ数の間にリーダーを配置する、または空白にする処理法もある。しかし、読者は、項目を見ると同時にページ数を知りたいわけであるから、わざわざ、離す必要はないであろう。

## 子項目と折り返し

親項目と子項目方式にした場合、子項目における親項目との共通部分は、一般に2倍ダーシで示す。子項目は、親項目より1字下ガリとすると区別がつく。

長い項目あるいはページ数が多い場合で、折り返す必要がある場合も行頭から1字下ガリ（子項目の場合は2字下ガリ）とする例が多い。

- (1) 公用文の表記の基準 5, 9  
国際単位系 243, 255  
固有名詞 5, 23, 78  
参考文献 134, 178  
参照符 56, 89  
時間の単位 235, 245
- (2) 公用文の表記の基準 5, 9  
国際単位系 243, 255  
固有名詞 5, 23, 78  
参考文献 134, 178  
参照符 56, 89  
時間の単位 235, 245
- (3) 公用文の表記の基準 5, 9  
国際単位系 243, 255  
固有名詞 5, 23, 78  
参考文献 134, 178  
参照符 56, 89  
時間の単位 235, 245
- (4) 公用文の表記の基準 5, 9  
国際単位系 243, 255  
固有名詞 5, 23, 78  
参考文献 134, 178  
参照符 56, 89  
時間の単位 235, 245

図1

## 見出しの処理

### 日本語組版とつきあう その37

#### 見出しのラベル名・番号の利用1

掲載日：2014年9月17日

## 見出しの構成

見出しはいくつかの要素で構成されている。ここではJIS X 4051で用いている名称を使うことにする。図1にJIS X 4051の見出しの構成を示した図を掲げておく。なお、“副題”は、“サブタイトル”とよばれることが多い。

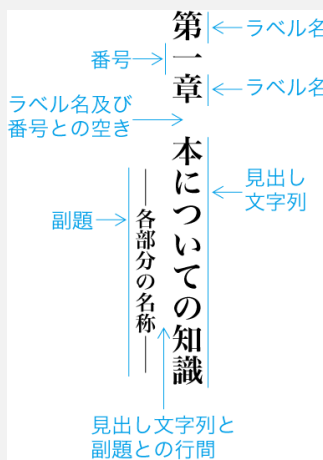


図1

## 見出しは内容を区分けする

書籍の見出しは、書籍の内容を区分けし、その内容を端的に示すことである。内容区分は、1段階の場合もあれば、5段階や6段階に及ぶ場合もある。一般に、内容区分の段階を多くすると理解が困難になる場合もあり、3段階くらいが望ましいといわれている。

5段階や6段階にもなる見出しは、その構成が複雑になり、本を読んでいて、どの段階の区分なのか、どの内容のくくりに含まれているのかをす

ぐに理解できなく、見直しをしないとイケないこともあるからである。ただ、本の内容によっては、どうしても多段階にしないとイケない場合もでてくる。

## 見出しのレベルを分かりやすく

見出しは、内容を示すとともに、この区分したレベルを読者に直感的に理解できるようにする必要がある。3段階の見出しは、一般に大きな内容区分のものから大見出し、中見出し、小見出しとよばれているが、一見して、この区別を理解できなければならない。

そこで、改丁・改ページの利用、見出しのフォント・文字サイズ、行取り、字下げなどによりアクセントをつけていく。見出しを区分したレベルが多段階の場合は、中扉（半扉）を利用する、あるいは小見出しで同行見出し（本文の行頭に掲げる見出し）を利用するなどの方法で、レベルを示す工夫も必要になる。

## 見出しのラベル名・番号の利用

見出しを区分したレベルが3段階くらいでも、本を読んでいる、見出しの文字サイズや行取りなどで差をつけていても、そのレベルがどこかなと混乱する例もある。ましてや見出しの段階が多い場合、その差のつけ方もむづかしく、読者が混乱する場合もでてくる。

そこで、ラベル名と番号で見出しのレベルの差を示すとよい。なお、ラベル名や番号とは、図1に示したように見出しの冒頭につく、レベルや順序を示す文字や数字等のことである。

## ラベル名・番号のつけ方の慣習

見出しのラベル名や番号には、きちんと決まったルールではないが、これまでの本づくりの経験のなかから、おおよその慣習がある。これは読

者も、そのように理解するものなので、この慣習からはすれない方が望ましい、といえよう。

ラベル名と番号をつける場合、ラベル名と番号の両方をつける方法と、上位の見出しだけはレベル名と番号を併用するが、下位の見出しは番号だけとする方法、すべての（または上位の）見出しに番号だけをつける方法がある。しかし、多段階の場合は、少なくとも上位の見出しは、レベル名と番号を併用した方が読者に理解しやすいだろう。

### ラベル名のつけ方

ラベル名をつける場合、一般には、3段階の見出しであれば、“章・節・項”の順となる。小見出しのラベル名の“項”はつけずに番号だけでもよい。十分に読者に理解できる。さらに上位のものは、“部・編”などが利用できる。

### 番号のつけ方

ラベル名をつけないで、番号だけで示す方法もある。この場合、番号には、ローマ字や数字が利用される。このローマ字や番号には、おおよその序列があるので、それを考慮する必要がある。

横組を例にとると、もっとも上位の番号は、ローマ字の大文字、次がアラビア数字、ローマ字の小文字といった序列になり、さらに下位ではパーレンでくくったアラビア数字やローマ字の小文字、丸付きのアラビア数字といった序列になろう。

縦組でいえば、漢数字の方がアラビア数字よりは上位になると考えられる。さらに上位にはローマ数字（時計数字）の大文字が利用される。

理工学書などでは、数字を並べてつけていく方式も使われる。ポイントシステムとよばれている。

ラベル名に比べ、番号だけの場合、ポイントシステムを除いて、読者にとって序列の理解は、いくらか劣る。そこで、番号だけの見出しやラベル名も番号もつけない見出しの場合、読者にレベルの区別がすぐ理解できるように配置方法で、はっきりとした差をつける必要がでてくる。

## 日本語組版とつきあう その38

### 小見出しの配置方法

掲載日：2014年10月27日

#### 小見出しの利用

見出しのレベルの数が多くなり、5段階や6段階にもなる場合、大きなレベルの見出しでは中扉や半扉を利用するとともに、小さなレベルの見出しで、その配置を工夫する必要がある。

最も一般的な小見出しの配置方法としては、図1の例のように、見出しだけを独立した行として配置し（別行見出しという）、見出しの書体をゴシック体等にし、その前を1行アキとする方法である。縦組の書籍でも横組の書籍でも、この配置方法はよく見掛ける。

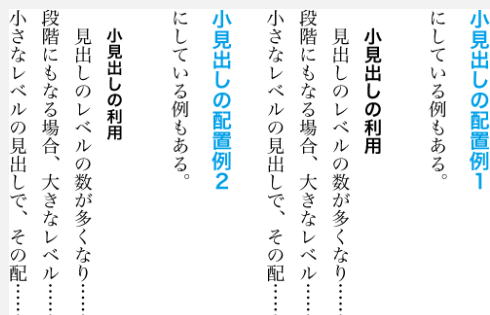


図1

## 別行の小見出しの書体と文字サイズ

別行の小見出しで、書体にゴシック体を使用した場合、本文と同一サイズとする方法（図1の右の例）と、本文より1段階小さくする方法（図1の左の例）がある。新書判や四六判などでは、1段階小さくした例をよく見掛ける。

ゴシック体の場合、同一サイズにするとやや強調されすぎて、バランスがよい、ということであろう。

なお、活字組版の時代には、仮名のゴシック体でよいものが少ないということから、漢字はゴシック体とするが、仮名はアンチック体とした例がそれなりにあった。現在でも、この配置方法としている例もある。しかし、今日では、ゴシック体も洗練されてきているのだから、漢字と仮名は同一の書体とした方がよいであろう。

また、一般に本文の段落の先頭行を1字下ガリとしているが、小見出しでも、これとそろえ、本文の1字下ガリとしている。1字下ガリとしないで、天付きにしている例もある。

## 別行の小見出しの前の1行アキ

小見出しは、改丁・改ページとしないで、前の本文に続けて配置するが、たまたま小見出しの直前でページが改められた場合、1行アキをどうするかが問題となる。次のような3つの考え方がある。

### (1) なりゆきで処理する。

前ページの本文の最後が版面末尾までである場合、次の先頭ページの小見出しの前は1行アキとする。前ページの本文の最後の版面末尾が1行アキ（または見出しを版面末尾に配置しないように2行アキ）となる場合、

次の先頭ページの小見出しの前は1行アキとしないで、版面先頭に配置する。

**(2) 版面の先頭にある小見出しの前は、かならず1行アキとする。**

この場合、前ページの本文最後は、版面末尾までである、1行アキ、または2行アキのいずれかである。

**(3) 版面の先頭にある小見出しの前は、1行アキとしないで、必ず版面先頭に配置する。**

この場合も、前ページの本文最後は、版面末尾までである、1行アキ、または2行アキのいずれかである。

一般には(1)の方法であるが、なかには(2)または(3)の方法を採用している例もある。(2)または(3)の方法は、処理法としてはやや面倒である。

(3)の方法は、版面の先頭では、版面の前(縦組)、または上(横組)に余白があるのであるから、1行アキにする必要はないという考え方からである。どちらかといえば、横組で、この考え方をとる例がある。(2)は、見出しの前の1行アキは必ず見出しに付属しているという考え方からである。

## **同行見出しの利用**

小さなレベルの見出しが多くなる場合、同行見出しを利用するとよい。同行見出しとは、見出しを独立した行とはしないで、本文の行の先頭に配置する方法である。この場合、見出しに続く本文を2行または3行にする方法がある。窓見出しとよばれており、新書などで利用されている。



ここでは、窓見出しでない、見出しに続く本文は1行である同行見出しの例を図2に掲げる（図2のような見出しは行頭見出しとよばれることもある）。

例1は本文と同一サイズのコシック体、例2は本文よりは1段階小さくしたゴシック体、例3は番号をつけ、その番号だけ強調した例、例4は番号はつけるが、本文と同じ書体を使用した例である。

例3のように、番号だけを強調する例は、別行のゴシック体の小見出しのさらに下位のレベルの小見出しなどに利用できる。この番号だけ強調するという方法は、少しだけアクセントをつけたい場合に便利な方法で、別行の小見出しでも利用できる。

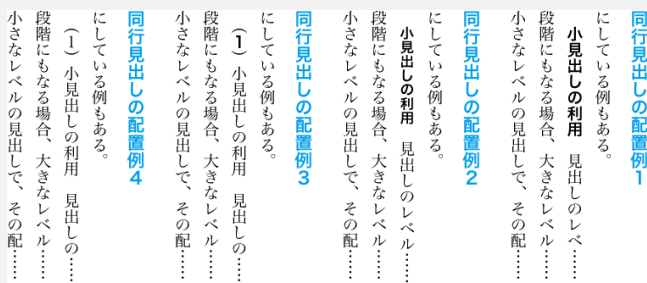


図2

## 日本語組版とつきあう その39

### 改丁・改ページとその前ページの処理

掲載日：2014年11月11日

## 改丁・改ページの処理

改丁・改ページ処理は、見出しなどを新しいページから開始する処理で、改丁は奇数ページで開始し、改ページは奇数・偶数に関係なく、新しいページから開始する処理である。

なお、改丁の丁とは、本を構成する1枚1枚の紙葉を数える単位で、表裏の2ページ1枚を1丁という。本のページ数は、紙葉の表面から開始するので、最初の紙葉の表面は必ず1ページとなり、次からの紙葉の表面も必ず奇数ページとなる。改丁とは新しい紙葉から開始することなので、新しい紙葉の表面は必ず奇数ページとなる。

別の言い方をすると、本を開いた見開きの2ページでは、数の多いページ数（縦組では左側、横組では右側）は必ず奇数となり、数の少ないページ数は偶数となる。見開きページでは101ページと102ページという組合せはなく、100ページと101ページという組合せになる。

初期のコンピュータ組版では、改ページ処理はできるが、改丁の処理ができないシステムもあった。こうしたシステムでは、奇数ページで開始する大見出しなどを別のファイルにし、開始ページを奇数ページに指定することで処理していた。

しかし、今日では、改丁・改ページ処理は、ほとんど問題なく処理できるシステムが多い。

## ウィドウの問題

欧文組版では、段落の最終行が短く、1単語か2単語程度で、これらの行がページの先頭の行や、段組において先頭の行に配置されることはウィドウとよばれ、避けなければいけないとされてきた。

日本語組版では、ウィドウはあまり問題とはされていない。しかし、段落の最終行が“る。”などといった1字だけの行となり、これがページや

段の先頭の行に配置される場合だけでなく、ページや段の途中にあっても、あまり美しいものではない。行の調整処理で直すようことではないが、文章を直せる立場であれば、修正してもよい。

### ウィドウの極端な例

改丁・改ページと関連し、このウィドウが極端に現れる場合がある。それは、改丁または改ページ処理をした結果、それ以前の文章において、最終段落の最終行が“る。”となり、それがたまたま偶数ページに配置される場合もある。

これは、見た目にあまりにもよいものではない。“る。”の前に何文字かもってくるか、“る。”を前のページに追い込んでしまうなど、なんらかの工夫を必要とする。

改ページ処理で、たまたま奇数ページの先頭に“る。”だけが配置された場合は、その前に偶数ページがあるので、いくらかはよいが、これでもできれば、なんらかの処理をした方が望ましいであろう。

また、これと似た問題に“まえがき”や“あとがき”などで最後につく年月日や著者名だけが、その箇所の最後のページに配置されることがある。これもあまり好ましいものではない。“まえがき”や“あとがき”などの見出しの行取り数を増やすなどの工夫をして、年月日や著者名の前に少なくとも1行の文章を配置した方がよい。

### 改丁・改ページと段組

段組において、改丁・改ページ処理を行う場合、その前ページの処理が問題となる。改丁・改ページ処理を行った場合、一般にその前ページでは、末尾に余白がでる。この余白をどう処理するかという問題である。

横組では、左右のバランスをとった方がよい。そこで、改丁・改ページ処理を行った場合、その前ページでは各段の行数が同じになるように配置する（図1参照）。

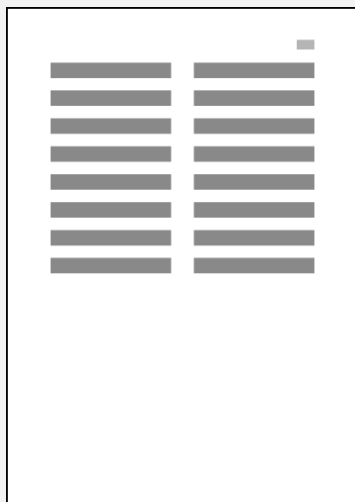


図1

これに対し、縦組では、上下のバランスはあまり必要としない。そこで、各段の行数を平均にしないで、なりゆきで配置していく（図2参照）。

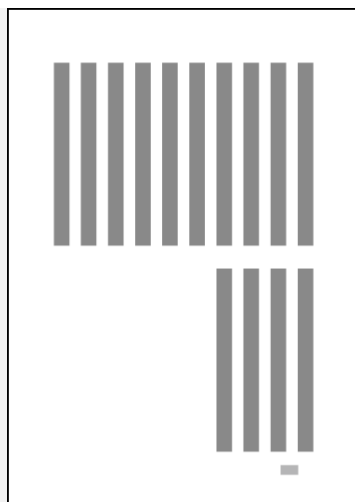


図2

こうした処理は、索引などの最終ページでも必要になる。

### 横組で段数をそろえる処理

ところで、横組の段組で、各段の行数をそろえる場合、各段の行数がすべて同じにならないことも多い。

この場合は、不足する行は、すべて最終段の末尾で処理するようにする。

例えば、3段組で、そのページに配置する行数が33行の場合は、各段とも11行とすれば問題はない。これが32行となった場合は、1段目と2段目は11行とし、3段目を10行とする。配置する行数が31行の場合は、1段目と2段目は11行とし、3段目を9行とする。

## 日本語組版とつきあう その40

### 字数の多い見出しの問題点

掲載日：2014年12月25日

#### 字数の多い見出し

字数の多い見出しは、本を読む立場から考えてもあまり望ましいものではない。本文の内容がどんなものか要点を知る、目次で全体の流れを読む、柱で内容を確認する、などといったように見出しの利用度は高いので、原稿編集（原稿整理）で十分に検討する必要がある。

しかし、内容を表現するうえでどうしても字数が多くなる場合もでてくる。このような場合、組版上からも問題があるので以下で考えてみよう。

#### 字数の多い見出しと柱

字数の多い見出しを1行で柱に掲げると、版面の半ばをこえてしまう場合がある。このような柱は、本を読んでいく際に邪魔に感じる場合がある。できれば柱は、版面の半ばをこえないようにするのが望ましい。

柱は必ずしも見出しとまったく同じでなくても、読者は理解できるので、一部が省略できるのであれば短くするとよい。

また、左右中央に配置した柱は、字数の多い場合もいくらか問題が解消できるので、配置位置や文字サイズで工夫するとよい。

#### 見出しは版面一杯まで配置できるか

字数の多い見出しで、1行のままだでは版面をはみ出す場合、当然に2行や3行に折り返す必要がある。

ところで、版面いっぱいまでは配置できるのであるから、そこまで見出しを配置してよいだろうか。縦組の例でいえば、版面ぎりぎりまで配置すると、版面に対して、いかにも見出しが下がり過ぎに見える。

そこで、4字下ガリの見出しであれば、見出しの下部は少なくとも4字くらいは空いているのが望ましい。

したがって、字数の多い見出しが含まれる場合は、見出しの種類ごとに1行にする最大の字数を定め、それをこえる場合は2行にする。

## 見出しを2行に折り返す箇所

見出しを2行に折り返す箇所は、1行目と2行目のバランスを考えながら適宜決めればよい。一律に何字目から折り返すという方針ではなく、区切りのよい箇所で折り返すと読みやすい。そこで熟語・固有名詞の途中や助詞の直前で折り返さないようにする。

## 折り返しの行頭の位置

折り返しの2行目の行頭の配置位置については、いくつかの方法があるが、一般に見出しの1行目よりは下げた方が安定する。

例えば、見出しの冒頭にレベルや順序を示す文字や数字等のラベル名がつく場合は、2行目の行頭をラベル名に続く見出し文字列（一般にラベル名と見出し文字列の間は見出し文字サイズの全角アキ）よりは、見出しの文字サイズで1字だけ上げるとよい（図1の右の例参照）。

ラベル名がない場合は、逆に、1行目よりは2行目の行頭を見出しの文字サイズで1字だけ下げるとよい（図1の左の例参照）。

第五章 製造費（直接費と間接費）の計算および  
発行部数の決定と定価計算の考え方  
製造費（直接費と間接費）の計算および  
発行部数の決定と定価計算の考え方

図1

## 折り返した見出しの行間

2行に折り返した見出しの行間は、まとまりのある1つの見出しであることを示すように狭める必要がある。行間が広いと、2つの見出しと誤解される場合もあるので、注意が必要である。

本文の行間にもよるが、見出しを2行に折り返す場合はその行間は二分から三分くらい、3行に折り返す場合はその行間は三分から四分くらいにするとよい。

## その他の問題

その他、見出しの行取りも、見出しの前後に配置する本文とのアキをそろえる必要があるので、折り返さない場合よりは1行ほど多くしておく。

いずれにしても、見出しの字数が多くなった場合は、組版上からも問題が出るので、原稿編集（原稿整理）の段階でも注意しておき、さらに組



版設計の段階でも、字数の多い見出しの処理をよく検討しておく必要がある、といえよう。

## 日本語組版とつきあう その47

### 中とびらの組版処理

掲載日：2015年7月10日

#### 中とびらの利用

書籍の場合、本文の内容を大きく区切るものとして“中とびら”がある。内容区分が5段階や6段階に及ぶ場合にも、中とびらは、そのレベルを示す方法として利用できる。

中とびらは本文と同じ用紙（共紙、ともがみ）とする例が多い。辞典などでは、特に付録や索引などの位置を明示するために本文とは別の紙（別紙、べつがみ）を使うこともある。

中とびらは、本文の1編1編の前に区切りとして、その部分の標題を掲げる。見出しの標題を中とびらに掲げない場合などでは、本文の冒頭に書名だけを中とびらとして掲げることもある。

なお、中とびらは、裏面を白ページ（裏白、うらじろ）とするのが原則である。

#### 半とびらの利用

中とびらを簡略にした形として、本文中において、表面には見出しを掲げるが、裏面から本文を始めるという形がある（裏白としない）。“半とびら”とよばれている。中とびらよりは、やや区切りの比重が小さくなる。

なお、“半とびら”という用語は、JIS Z 8125（印刷用語—デジタル印刷）に“中扉”とともに“半扉”として採用されている。

## 中とびらのノンブル

中とびらや半とびらには、柱は掲げないことはもちろん、ノンブルも一般に表示しないのが、現在の習慣となっている。しかし、活字組版で書籍を製作した際には、ノンブルを掲げる例もあった。

印刷用の版を作成する際には、ページの付合せが必要である。この作業を面付（めんつけ）というが、この面付の方法に違いがあった。

現在のデジタル印刷では、面付はデータ上で行う。ところが、活字組版では、組版はページ単位で作成され、さらに、この原版（げんばん）から複製される鉛版（えんばん）も、一般にページ単位で作成される。このページ単位で作成した原版または鉛版を印刷機の上で、製本した際にページがつながるように組付けている。

この組付の作業や製本作業で、ノンブルは重要な役割をもっており、ページの順序を示すとともに、各ページの刷り位置、折り位置が決められていた。そこで、特別の場合を除いて、どのページにもノンブルをつけるようにしたほうがよい、と考えられていた。（こうしたことから、ノンブルは一定の位置に置かれることに意味があり、ページにより勝手に位置をかえることは避けるべきこととされていたのである。なお、デジタル印刷であってもページ順の確認や読者のために、特に理由がないかぎり、ノンブルの位置を変える、あるいは表示しない、といったことは望ましくない。）

今日では、前述したようにデータ上で面付が行われているので、中とびらや半とびらにノンブルを表示する必要はないであろう。

## 裏白の処理

なにも表示するものがない白ページには、柱もノンブルも表示する必要はない。しかし、この白ページにノンブルを掲げた本を見掛けることが

ある。ノンブルの処理はDTPなどでは自動処理であるので、つい白ページにも表示されてしまう場合がある。注意が必要である。

### 中とびら・半とびらの次ページの処理

中とびら・半とびらの直後に配置される本文の冒頭には見出しが配置されることが多い。見出しが配置される場合は、見出しの配置のルールに従えばよい。

しかし、中とびら・半とびらの直後に配置される本文の冒頭に見出しがつかない場合がある。この場合、特に縦組の本では、本文のはじまりを数行あけている例がある。一般に2行くらい空けているが、文芸書などでは、4行ないし5行あけている例もある（図1に冒頭を2行空けた例、図2に空けていない例を示す）。本文の冒頭であることを示すためである。

今日の本では、このような処理をしない例が増えている。

書籍は、そのもので流通していく。そこで内容の理解を助けるために、書籍そのもので何らかの説明を加えるか、形で示していくことが大切である。その意味で、中とびら・半とびらなどの直後に配置される本文の冒頭に見出しが配置されない場合は、数行空けて、ここが始まりであることを示すアクセントをつけたほうがよいであろう。

難しい漢字の読み方を示す場合や、外国の難読語・外来語に仮名で読み・意味を示す場合、  
 振り仮名（ルビ）をよく利用する。  
 しかし、このルビの付け方・どの語に付けるかや、配置の方法・組織配置方法には多くの  
 方法があり、これが唯一の正しい配置方法であると決定するのはつかしい。そうではあるが、  
 やはり認識されない、読みやすい、バランスがとれている、という方法が考えられよう。  
 その方法は、ルビを付ける漢字・一字・読みを示すのか、熟語の読みを示すのか、また、その言  
 葉を別の片仮名語で示すのが目的なのか、その目的に応じて考えていく必要がある。組織ある組織  
 中でも、ルビの配置方法は変わってくる。また、ルビが付く語後に配置する文字、あるいは  
 は、ルビが付いた語が行中にあるのか、それとも行頭又は行末にあるのかによっても、ルビの配  
 置方法が変化するケースもあり、なかなかつかないである。  
 活字組版では、ルビの配置についての一般的なルールを前提に、個々の箇所で大丈夫でルビの  
 配置を決めている。問題があれば、校正段階で、個々の箇所ごとにルビの配置位置を変更してい  
 た。DTP等でも、ある程度のルールは決めている。個々の箇所やルビの入力方法を定め、  
 あらゆる配置のルールを変更し、その場にあった配置にすることも行われている。このような過

図1

難しい漢字の読み方を示す場合や、外国の難読語・外来語に仮名で読み・意味を示す場合、  
 振り仮名（ルビ）をよく利用する。  
 しかし、このルビの付け方・どの語に付けるかや、配置の方法・組織配置方法には多くの  
 方法があり、これが唯一の正しい配置方法であると決定するのはつかしい。そうではあるが、  
 やはり認識されない、読みやすい、バランスがとれている、という方法が考えられよう。  
 その方法は、ルビを付ける漢字・一字・読みを示すのか、熟語の読みを示すのか、また、その言  
 葉を別の片仮名語で示すのが目的なのか、その目的に応じて考えていく必要がある。組織ある組織  
 中でも、ルビの配置方法は変わってくる。また、ルビが付く語後に配置する文字、あるいは  
 は、ルビが付いた語が行中にあるのか、それとも行頭又は行末にあるのかによっても、ルビの配  
 置方法が変化するケースもあり、なかなかつかないである。  
 活字組版では、ルビの配置についての一般的なルールを前提に、個々の箇所で大丈夫でルビの  
 配置を決めている。問題があれば、校正段階で、個々の箇所ごとにルビの配置位置を変更してい  
 た。DTP等でも、ある程度のルールは決めている。個々の箇所やルビの入力方法を定め、  
 あらゆる配置のルールを変更し、その場にあった配置にすることも行われている。このような過  
 理方法で、互間的なことを決めたルールでも、ある程度あまいところを含んでいてもよいこと  
 になる。

図2